日々精進

岡山県　桂巌寺　副住職　山本貫道

「日々精進」、かつて修行をともにした和尚様が筆で書いてくださった団扇を見るたび、私は修行時代のことを思い出します。今から二年前の四月一日、私は岡山県矢掛町にある洞松寺という地方僧堂で一年間修行する事となりました。

私が洞松寺の山門を叩いた日はあいにくの大雨で、しかも遠くで雷まで鳴っているほどでした。「一年間頑張って」そう言って、早々に帰ってしまった師匠を横目で見ながら、同安居、修行の同級生になる三重県からの修行僧の方と顔を見合わせました。

山門の横に掛けられていた木版と呼ばれる木の板を三打し、迎えの人が来るまで二人きりで待つことになりました。三十分ほど待ちましたが、一向に迎えが来る気配がありません。しばらくして玄関から先輩僧侶の方が現れ、ようやく山門を潜ることが許されました。

その後一週間、修行僧としての立ち居振る舞いを教えてもらう期間があけ、晴れて洞松寺の仲間入りを果たした私を待ち受けていたのは「言葉の壁」という試練でした。この洞松寺には、ブラジルやドイツ、フランス等、世界中から数多くの方々が修行に来ています。それはもう国際色豊かで、さまざまな国の言葉が飛び交っていました。お寺では日本語と英語を使って話しますが、あいにく私は英語が苦手で、話すことも聞き取ることも出来ませんでした。辛うじて身振り手振りで、何を伝えようとしているのかわかるくらいです。

しかしその身振り手振りも、国によって意味が変わってきます。例えば日本でいう「手招き」は、手を上げ下げする動作を取りますが、これが海外では「あっちへ行きなさい」という意味になることが多いようです。何も考えず手招きされたからと思い、近寄れば「何故来るの？」という顔をされてしまうこともありました。このような動作も言葉と同時だとわかるのですが、朝のお勤めや食事の時など、身振り手振りがしづらいときには判断が難しくなってしまいます。そんな時私はすぐには動かず、状況をよく見て、これから何が起きるかあるていど判断して動くようになりました。

そんな慣れない環境での修行の日々でしたが、半年も経つと、私も先輩僧侶、「古参」と呼ばれる立場になりました。そして、あれほど苦労した言葉の壁も、共同生活を続けていくうちに、受け答え程度ならほとんど問題なく対応できるようになっていました。修行当初の私からすると、見違えるような進歩です。

「石の上にも三年」「継続は力なり」という言葉があるように、何事も辛抱強くコツコツと積み上げていけば、それなりの成果は出るのだと実感したものです。一年の修行生活を振り返って思うのは、あの時の言葉の壁を、どうにかしようと格闘していた日々は、正に私にとって修行そのものでした。今は地元に帰り、師匠のもとで修行の毎日です。これからも「日々精進」を旨として歩んで参りたいと思います。